

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

被調査者の属性による偏りを持たない項目：  
『国語に関する世論調査』(H7年度調査～H10年度  
調査)から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): Public Opinion Survey of the Japanese Language, accountableness of attributes, social attribute, regional attribute, CATDAP 作成者: 田中, ゆかり, TANAKA, Yukari メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002060">https://doi.org/10.15084/00002060</a>

# 被調査者の属性による偏りを持たない項目 —『国語に関する世論調査』(H7年度調査～H10年度調査)から—

田中 ゆかり  
(日本大学)

## キーワード

『国語に関する世論調査』、属性の説明力、社会的属性、地域的属性、CATDAP

## 要 旨

文化庁国語課による『国語に関する世論調査』の平成7年度調査から平成10年度調査までの4回の調査結果に基づく報告を行う。報告は、各年度ごとの調査項目において被調査者属性が説明力を持たない／弱い項目を抽出することが中心である。被調査者属性が説明力を持たない／弱い項目とは、地域的・社会的属性などの「被調査者属性による偏りのない項目」ということになる。日本全国16歳以上の男女を対象とした無作為抽出による大規模な調査において、どのような項目が、「偏りを持たない」つまり、「衆目の一致する」項目に該当したか、ということを知ることは、今後の「共通語」あるいは「共通語」的認識を知る上で有効であると考える。典型的な「偏りを持たない」項目は、従来的な言語規範意識に関わる項目、従来「誤用／誤認識」「新形／新認識」とされてきたもののうちすでに「共通語」的位置にある項目、回答数が非常に少ないために偏りが抽出されない項目であることが分かった。また、項目と被調査者属性との関わりだけでなく、項目間における説明力を持たない項目の抽出も行った。

## 1. はじめに

文化庁国語課による『国語に関する世論調査』は、平成7(1995)年度調査から平成11(1999)年度調査まで、計5回実施され、それぞれ年度ごとに文化庁から『世論調査報告書』が刊行されている。また、同世論調査は、総理府によって昭和52(1977)年度・平成4(1992)年度の2回実施され、こちらもそれぞれ総理府から年度ごとに『世論調査報告書』が刊行されている。

各年度ごとの『世論調査報告書』は、主として集計結果（単純集計及び一部クロス集計）が報告されているものである。年度ごとの報告書に加え、平成10年度調査までの6回の調査データについて、類似項目間の年度比較などを行い、国語審議会の検討資料とする目的で作成された問題別報告書も刊行予定となっている<sup>1</sup>。問題別報告書では、「敬意表現を中心とした言葉遣いに関して」・「『異体字についての印象』について」・「外来語の認知度」・「日本語とコミュニケーション」・「国際化に関わる言語意識の年齢特性」・「『多様性』から見た調査結果の分析」という観点から分析が行われている。

本稿では、「国立国語研究所『国語に関する世論調査』分析のための調査研究協力者会議」において利用可能となった平成7年度調査から平成10年度調査のロウ・データから確認された「被調

査者属性による偏りを持たない項目」について述べていく。

ロウ・データは、縦列に被調査者、横列に調査項目が配列された長方形のアイテム・カテゴリデータである。同世論調査のデータは、全国16歳以上の3,000人を層化2段無作為抽出法によって抽出した標本における回答。各年度調査ごとの有効回答数と主な調査テーマは、次の通り（各年度報告書による）。

調査年度 [テーマ数質問数]	有効回答数	主な調査テーマ
平成7年度調査（以下、H7年度調査） [5テーマ20問（+SQ26問）]	2,212人	「言葉遣い」「敬語」「話し方」「外来語・外国語」「情報機器の発達と国語への影響」
平成8年度調査（以下、H8年度調査） [3テーマ22問]	2,240人	「敬語」「言葉遣い」「外来語の理解度」
平成9年度調査（以下、H9年度調査） [3テーマ24問（+SQ28問）]	2,190人	「敬語」「言葉遣い」「外来語などの理解度」
平成10年度調査（以下、H10年度調査） [3テーマ22問]	2,200人	「敬語や言葉遣い」「漢字の字体」「外来語などの理解度」

## 2. 用いた手法

各世論調査のロウ・データは、1. で述べた通り「縦列：被調査者×横列：調査項目」のアイテム・カテゴリデータである。縦列は1. で示した各年度世論調査の「有効回答数」分の被調査者が並び、横列は各年度の「調査項目」が並ぶデータセットである。「調査項目」は、必ずしも調査票において「Q」として表現される「質問」が現れるわけではない。Qの下位区分である「（）数字」（場合によっては「（）内カタカナ」）で表現される「選択肢」が、具体的質問である場合、「調査項目」として、データセットに現れる。それを決定しているのは、「質問」の方式である。いざれが「調査項目」として現れているかという観点から説明すると、次の2分類となる。

### （1）「質問」（調査票における「Q」）＝「調査項目」となる方式

例：H7年度調査Q3 「共通語と方言について、あなたのお考えはどちらに近いですか」という「質問」に対して、選択肢「相手や場面によって共通語と方言を使い分ければいい」「基本的には共通語を使い、方言はできるだけ使わない方がよい」「どちらとも言えない」から1つだけ選択する方式

### （2）「選択肢」（調査票における「（）数字」等）＝「調査項目」となる方式

例：H7年度調査Q2 「ここにあげた（1）から（7）のそれぞれの意見について、あなたはどう思いますか。「そう思う」か「そう思わない」かでお答え下さい。」

具体的質問：（1）「今の言葉は乱れている」

～（7）「言葉は時代とともに変わるものであり、自然に任せた方がよい」

なお、H7年度調査Q1 「あなたは、よりよい言葉遣いのために、一人一人がどのような

ことに心がければよいと思いますか。この中から三つまで挙げて下さい。」として、個数制限複数回答可の「質問」方式も、「選択肢」ごとの「選択／非選択」という反応を表現したデータセットとなっているため、H 7 年度調査Q 2 と同様に、(2) 式の「選択肢」 = 「質問項目」に相当することになる。

上記の 2 分類による各年度世論調査の「調査項目（以下、項目）」数は、次の通り。

H 7 年度調査（73項目） H 8 年度調査（163項目）  
H 9 年度調査（91項目） H 10 年度調査（156項目）

上述のような構成からなる、各年度ごとのロウ・データをカテゴリカル・データのモデル分析用のプログラム CATDAP-01 (CATegorical Data Analysis Program 01) によって解析した結果を、以下の分析に用いていく。CATDAP-01は、「目的・説明変数ともカテゴリカルなデータにおいて最適な説明変数を選択するためのプログラム」(坂元慶行・桂康一 1988)で、情報量規準統計量の AIC<sup>2</sup>を、説明変数の最適性を示す指標として用いる多変量解析の手法である。AIC が、項目ごとに算出され、その AIC の値によって、当該の項目の説明変数としての適格度を計る解析方法である。AIC の値は負に大きいほど、当該の説明変数に情報量が多いことを意味する。

CATDAP-01 を用いる理由として、同世論調査が、サンプル数2000を超える規模の調査であることから、「被調査者属性と項目すべてについてクロス集計を行い、カイ二乗検定を行う」という方法を用いることに積極的な意味が見出せない、ということもある。サンプル数が数百から数千という規模のデータにおいて、カイ二乗検定は、実質的に無意味な連関が観察される場合においても、有意になることが多いとされているためである(豊田秀樹 1998, p.63等)。

CATDAP-01 は、上述のように、本来、あるデータにおいて適格な説明変数を探索するためのプログラムであるが、ここでは、CATDAP の解析結果に次のような解釈をほどこし、用いていく。

「被調査者属性のいずれかが説明変数としてふさわしい」項目は、「『説明変数としてふさわしい』被調査者属性において、回答に偏りがある項目」であることを意味する。つまり、「説明変数としてふさわしい項目」は「項目の回答傾向についての情報量が大きい」ことになる。

本稿での分析においては、CATDAP-01 によって算出されるAIC要約値 (AICをサンプル数 (= 有効回答数) で割ったもの) を「説明力」の仮尺度として用いる。AIC要約値は、CATDAP-01において次のように算出される ( $aic = AIC \text{ 値} \cdot nsamp = \text{サンプル数}$ )。また、AIC要約値 1 ~ 4 に対して、「説明力」の仮尺度として、要約値の後の ( ) 内に示したような「名づけ」をこれも仮に行う。

#### 【AIC要約値】

4 (きわめて説明力を持つ) :		aic/nsamp <	-0.100
3 (かなり説明力を持つ) :	-0.100	< aic/nsamp <	-0.050
2 (説明力を持つ) :	-0.050	< aic/nsamp <	-0.010
1 (やや説明力を持つ) :	-0.010	< aic/nsamp <	0.000
0 (説明力を持たない) :	0.000	< aic/nsamp	

H 7 年度調査データを CATDAP-01 で解析した結果の、「被調査者属性」と「項目」に関する AIC 要約値のマトリックスの一部を、例として以下に示す<sup>3</sup>。マトリックスの空欄は、上記 AIC 要約値の 0 に同じ。

以下の分析では、ここで示した AIC 要約値のマトリックスを素材として進める。なお、本稿で用いる CATDAP-01 の解析に際しては、統計数理研究所の坂元慶行氏・田村義保氏・桂康一氏の協力を得ている。

【H7年度調査CATDAP-01 AIC要約値 縦列：被調査者属性×横列：項目】

### 3. 「偏りを持たない項目」

さて、本稿では、1. で示した通り、「被調査者属性による偏りを持たない項目（以下、「偏りを持たない項目」とする）」について検討を加えていく。「偏りを持たない項目」とは、被調査者の地域的・社会的属性による偏りのない、あるいはほとんど偏りを見せない項目とする。「偏りを持たない項目」は、「被調査者属性」において「説明力」の仮尺度が、「0」であることになる。被調査者属性全てにおいて仮尺度が0の場合、「被調査者属性が説明力を持たない項目」であることになり、その項目が「偏りを持たない項目」ということになる。そのような「偏りを持たない項目」は、被調査者属性である「都道府県」「地域」「都市規模」「性」「年齢」「職業」による偏りをみせない、つまり地域差・社会差を持たない「一様な回答傾向」を示す項目だということになる。

同世論調査は、1.に示した主な調査テーマにあるように、「共通語」を念頭においていた調査内容

となっている。「共通語」が念頭に置かれた調査票であることは、同世論調査や同世論調査報告書が、国語審議会における参考資料となることなどを勘案すると、ある意味当然と言えそうである。

しかし、実際のところ同世論調査報告書や、問題別報告書を検討すると、被調査者の属性による偏りを示す項目が少くない。同世論調査で調査・分析項目とされている被調査者属性<sup>4</sup>は「都道府県（47区分）」「地域（9区分）」「都市規模（5区分）」「性（2区分）」「年齢（7区分）」「職業（13区分）」の6つの属性である。それぞれの属性の各年度世論調査報告書における区分は次の通り。

都道府県：47都道府県

地域：「北海道」「東北」「関東」「北陸」「中部」「近畿」「中国」「四国」「九州」

都市規模：「東京都区部」「政令指定都市」「人口10万以上の都市」「人口10万未満の都市」「町村」

性：「男性」「女性」

年齢：「10代」「20代」「30代」「40代」「50代」「60代」「70代以上」

職業：「農林漁業（自営業主）」「商工サービス業（自営業主）」「自由業（自営業主）」「農林漁業（家族従事者）」「商工サービス業（家族従事者）」「自由業（家族従事者）」「管理職（被庸者）」「専門技術職（被庸者）」「事務職（被庸者）」「労務職（被庸者）」「主婦（無職）」「学生（無職）」

「その他の無職（無職）」

#### 4. 各年度世論調査データにおける被調査者属性の「説明力」

H7年度調査からH10年度調査において「被調査者属性」が、「項目」に対して持つ「説明力」仮尺度ごとの分布数を示したものが表1～表4。

全体的に、「都道府県」「地域」「都市規模」という被調査者属性は、H8年度調査における「地域」を除くと、被調査者属性が「0：説明力を持たない」項目が過半数を占めていることが分かる。これは、同世論調査の項目が、「共通語」としてどうかということを前提としている項目を中心を選定されたであろうことを考えると、予想できる結果である。「都道府県」「地域」「都市規模」という地域差に関わる属性において「3：かなり説明力を持つ」「4：きわめて説明力を持つ」といった強い説明力を示す項目がまったく現れないか、現れていたとしてもごく少数なのも、同様の理由であろう。

一方、「性」「年齢」「職業」という社会的属性においては、「0：説明力を持たない」は少数派である。とりわけ「年齢」はH9年度調査・H10年度調査で1割未満となっており、同世論調査全体に「年齢」が大きな影響力を持つことが分かる。また、地域性に関連する被調査者属性においては、強い説明力があることを意味する仮尺度3・4における項目分布数が著しく低いのに対して、「性」「年齢」「職業」は一定程度の説明力を持つ項目が存在していることも分かる<sup>5</sup>。これは、前述の同世論調査の持つ「共通語」の性質を勘案しても、現代日本における「地域差よりも社会差」といった全体的な傾向に従う結果といえる。ただし、このような性質のデータにおいても現れる地域差は、かなり大きな意味合いを持つものとも考える必要があることは確かで、「地域差」という「多様性」を含む項目についての検討は、必要である。もちろん、「社会差」という「多

【CATDAP 被調査者属性の「説明変数」としての適切性を示す仮尺度と該当項目数】

※仮尺度 0：説明力を持たない 1：やや説明力を持つ 2：説明力を持つ 3：かなり説明力を持つ 4：きわめて説明力を持つ

表1. H 7調査 該当項目数（全73項目数における%）

属性／仮尺度	0	1	2	3	4
都道府県	58(79.5)	6( 8.2)	9(12.3)	0	0
地域	36(49.3)	19(26.0)	16(21.9)	2(2.7)	0
都市規模	51(69.9)	22(30.1)	0	0	0
性	21(28.8)	30(41.1)	21(28.8)	0	1( 1.4)
年齢	9(12.3)	13(17.8)	26(35.6)	11(15.1)	14(19.2)
職業	23(31.5)	16(21.9)	16(21.9)	3( 4.1)	15(20.5)

表2. H 8調査 該当項目数（全163項目数における%）

属性／仮尺度	0	1	2	3	4
都道府県	103(63.2)	14( 8.6)	39(23.9)	6(3.7)	1(0.6)
地域	62(38.0)	45(27.6)	50(30.7)	5(3.1)	1(0.6)
都市規模	87(53.4)	50(30.7)	26(16.0)	0	0
性	60(36.8)	64(39.3)	31(19.0)	3(1.8)	5(3.1)
年齢	47(28.8)	53(32.5)	40(24.5)	8(4.9)	15(9.2)
職業	81(49.7)	27(16.6)	35(21.5)	10(6.1)	10(6.1)

表3. H 9調査 該当項目数（全91項目数における%）

属性／仮尺度	0	1	2	3	4
都道府県	78(85.7)	4( 4.4)	8( 8.8)	0	1( 1.1)
地域	57(62.6)	28(30.8)	5( 5.5)	0	1( 1.1)
都市規模	54(59.3)	21(23.1)	16(17.6)	0	0
性	26(28.6)	38(41.8)	24(26.4)	3( 3.3)	0
年齢	8( 8.8)	21(23.1)	39(42.9)	10(11.0)	14(15.4)
職業	30(33.0)	26(28.6)	16(17.6)	6( 6.6)	13(14.3)

表4. H 10調査 該当項目数（全156項目数における%）

属性／仮尺度	0	1	2	3	4
都道府県	131(84.0)	13( 8.3)	12( 7.7)	0	0
地域	91(58.3)	49(31.4)	16(10.3)	0	0
都市規模	88(56.4)	52(33.3)	16(10.3)	0	0
性	35(22.4)	52(33.3)	25(16.0)	2( 1.3)	42(26.9)
年齢	12( 7.7)	18(11.5)	49(31.4)	27(17.3)	50(32.1)
職業	27(17.3)	23(14.7)	32(20.5)	22(14.1)	52(33.3)

※注1：配偶者のいる人で、本人の性別に質問している項目数42項目

様性」についても同様である。これら6つの属性による偏りがみられる項目についての分析は田中ゆかり（近刊）がある。

本稿では、逆に一様な回答傾向を見せる「偏りを持たない項目」はどのような性質を持つ項目か、という点に着目する。この「偏りを持たない項目」は、つまり「衆目の一致するところ」ということになる。このような「衆目の一致する項目」は、従来「共通語」あるいは「共通語」的

認識とされてきた項目の再確認という側面だけではなく、従来「誤用／誤認識」「新形／新認識」とされてきた項目が「共通語」的位置にすでにあるか否かの判断に貢献するという側面も持ちそうである。どのような「項目」に出現しているかについて、以下で検討を加えていく。

## 5. 被調査者属性が説明力を持たない項目

そこで、被調査者属性が説明力を持たない項目をH7年度調査からH10年度調査の4回の同世論調査の全項目から抽出することにする。「都道府県」「地域」「都市規模」「性」「年齢」「職業」の6つの被調査者属性すべてにおいて「0：説明力を持たない」項目と、4において地域的属性に比べて大きな説明力を持つことが分かっている「性」「年齢」「職業」の3つの社会的属性において「0：説明力を持たない」項目を抽出したものが表5（H7年度調査）・表6（H8年度調査）・表7（H9年度調査）・表8（H10年度調査）。以下では、各年度ごとにCATDAP-01によって抽出された「偏りを持たない項目」を個別に検討していく。

### 5.1. H7年度調査における説明力のない項目

H7年度調査において、6つの被調査者属性すべてにおいて説明力がない項目は、Q1—9・Q6—3の2項目。それぞれの項目の質問と該当項目を次に示す。

#### Q1—9

質問：あなたは、よりよい言葉遣いのために一人一人がどのようなことを心がければよいと思いますか。この中（選択肢8。別に「その他」・「分からぬ」）から三つまで上げてください。

選択肢項目：「その他」0.5%

#### Q6—3

質問：ここにあげた敬語に関する（1）から（4）の意見について、あなたはどう思いますか。  
「そう思う」か「そう思わない」かでお答え下さい。

選択肢項目：（3）「目上の人には敬語を使う方がよい」「そう思う」91.3%

Q1—9については、具体的な内容が示されない「その他」の回答数が0.5%と非常に少ないため、被調査者属性による偏りを単に示さないものといえる。この選択肢式項目における「その他」「分からぬ」は被調査者属性で説明されないことが他年度世論調査においても見られるが、その理由は、ここで述べたようにサンプル数が単に少ないと考えられる。

Q6—3は、敬語を使用する相手に関する質問。他の選択肢は、（1）「親しい人（友人など）に敬語を使うのはよそよそしい感じがする（「そう思う」73.7%）」・（2）「あまり親しくない人には敬語を使う方がいい（「そう思う」62.3%）」・（4）「年下の人にも場合によっては敬語を使う方がいい（「そう思う」71.4%）」。（1）（2）（4）は、すべて年齢差を持ち、（4）は性も説明力を持つ。年齢差については、30代以下の若い層において「そう思う」が40代以上に比べて多い。ただし、（4）においては、10代男性の「そう思う」が低い。つまり、「偏りを持たない項目」である（3）は、敬語を使用する相手として「目上」という従来的な上下関係に基づく項目であるためといえる。

表5. H7調査：被調査者属性が説明力を持たない項目

【凡例】6：被調査者全6属性で説明力なし 3：性・年齢・職業3属性で説明力なし 性：性説明力なし  
年：年齢説明力なし 職：職業説明力なし ID：項目ID DK：分からぬ ○：該当項目説明力なし

ID	全項目	6	3	性	年	職	ID	全項目	6	3	性	年	職	ID	全項目	6	3	性	年	職
1	Q1-1						26	Q8						51	Q14-2					
2	Q1-2				○	○	27	Q9						52	Q14-3					
3	Q1-3					○	28	Q10-1						53	Q14-4					
4	Q1-4			○		○	29	Q10-2						54	Q14-5			○	○	
5	Q1-5						30	Q10-3					○	55	Q14-6					
6	Q1-6			○			31	Q10-4			○			56	Q15					
7	Q1-7					○	32	Q10-5				○		57	Q16					
8	Q1-8			○		○	33	Q10-6			○	○		58	Q17			○		
9	Q1-9	○	○	○	○	○	34	Q11-1						59	Q18					
10	Q1-DK			○			35	Q11-2			○	○		60	Q18SQ1					
11	Q2-1						36	Q11-3				○		61	Q18SQ2-1					
12	Q2-2						37	Q11-4						62	Q18SQ2-2					
13	Q2-3						38	Q11-5			○	○	○	63	Q18SQ2-3					
14	Q2-4						39	Q11-6					○	64	Q18SQ2-4					
15	Q2-5						40	Q11-7			○	○		65	Q18SQ2-5					
16	Q2-6						41	Q11-8			○			66	Q18SQ2-6					
17	Q2-7						42	Q11-9						67	Q18SQ2-7					
18	Q3			○			43	Q11-10				○	○	68	Q18SQ2-8					
19	Q4						44	Q11-11			○	○	○	69	Q18SQ2-9					
20	Q5						45	Q12					○	70	Q18SQ2-DK					
21	Q6-1			○		○	46	Q12SQ1						71	Q18SQ3					
22	Q6-2			○		○	47	Q12SQ2						72	Q19					
23	Q6-3	○	○	○	○	○	48	Q12SQ3						73	Q20					
24	Q6-4						49	Q13				○								
25	Q7			○		○	50	Q14-1												

目上への敬語使用をよいとする考えについては、91.3%とほとんどの被調査者が「そう思う」と答えている。一方、「親しくない相手」という親疎に基づく敬語使用の考え方や、「年下の相手」という従来の上下関係では敬語使用対象者として顕在化しにくかった相手に対する敬語使用については、全体の「そう思う」比率も6～7割程度である。敬語使用の一層の相対敬語化に関わる項目は、「年齢」や「性」による多様性を含んでいる段階にあることが分かる。逆に言えば、この結果は、「目上の人には敬語を使う方がよい」という考えは、「共通語」的認識として維持されていることを示していることになる。

性・年齢・職業3つの被調査者属性において説明力を持たない項目は、Q11-11。

#### Q11-11

質問：ここに挙げた（1）から（11）の文中の部分の言い方は、あなたにとって気になりますか、それとも気になりませんか。

項目：(11) 「無料休憩室を御利用いただけます」「気にならない」76.0%

Q11は敬語表現に関わる「気になる言い方」という一連の質問の一つ。「御利用いただく」は、76.0%が「気にならない」としている項目で、誤用か否かという観点からも、「御利用になっていただく」

の省略形ではあるが、問題のない表現である。他にも11の項目のうち問題のない表現とされている項目は、(3)「とんでもございません（「気にならない」78.7%）」・(9)「おめしあがりください（「気にならない」85.4%）」で、「気にならない」の比率は(11)「御利用いただく」と大差ない。しかし、(3)は「とんでもない」の語構成に関する解釈によって「とんでもないことです／ございます」を正とする考え方があることや、(9)は許容表現だが、「めしあがる」+「お～（になって）」という二重敬語であることなどが、これらの項目に対する多様性が現れる要因と考えられる。(3)は女性に「気になる」が多く、年齢では10代と60代に「気になる」が多くなっている。(9)は男性に「気になる」が多く、20代・30代に「気になる」が少なく、農林漁業（家族従事者）・管理専門技術事務・学生に「気になる」が少ない。

## 5.2. H 8年度調査における説明力のない項目

H 8年度調査における説明力のない項目は次の通り。6つの被調査者属性すべてにおいて説明力のない項目は、Q 2-3・Q 2-4・Q 9-1-カ・Q 9-2-キ・Q 9-3-ク・Q 9-3-ケ・Q 9-5-オ・Q 10-1-キ・Q 10-1-ク・Q 10-2-キ・Q 10-3-エ・Q 13-1・Q 13-4・Q 16-ク・Q 16-コ。

このうち、Q 9-1-カ・Q 9-2-キ・Q 9-3-ク・Q 9-3-ケ・Q 10-1-キ・Q 10-1-ク・Q 10-2-キ・Q 10-3-エ・Q 16-ク・Q 16-コは、それぞれの質問に対する「その他」「分からぬ」項目である。

Q 9-1は「見るか」、Q 9-2は「読んだか」、Q 9-3は「食べるか」を「目上の人についている場合」。Q 10-1「待っている」、Q 10-2「聞きたい」、Q 10-3「言いたい」を「目上の人についている場合」。Q 16-ク「あなたが敬語を使うとき」についての質問。

「その他」「分からぬ」項目以外の質問と項目は次の通り。

### Q 2-3

質問：ここに挙げた（1）から（8）の文中の下線部分の言い方について、あなたは気になりますか、それとも気になりませんか。

項目：(3)「(店の張り紙で)明日は休業させていただきます」「気にならない」91.6%

### Q 2-4

項目：(4)「(店で店員が)この商品は値引きさせていただきます」「気にならない」78.5%

### Q 9-5-オ

質問：目上の人についている場合にここに挙げた（1）から（5）のことを聞くとき、下線部分について、あなたはどの言い方をしますか。言うと思うものを幾つでも選んでください。

項目：(5)「あしたの会議で意見を言うか」「申されますか」10.8%

### Q 13-1

質問：ここに挙げた（1）から（5）の下線部分の言い方について、あなたは気になりますか、それとも気になりませんか。

項目：(1)「今日は寒いです」「気にならない」88.6%

表6. H8調査：被調査者属性が説明力を持たない項目

【凡例】6：被調査者全6属性で説明力なし 3：性・年齢・職業3属性で説明力なし 性：性説明力なし  
年：年齢説明力なし 職：職業説明力なし ID：項目ID ○：該当項目説明力なし

ID	全項目	6	3	性	年	職
1	Q1 - 1					
2	Q1 - 2					
3	Q1 - 3			○		
4	Q1 - 4				○	
5	Q1 - 5			○	○	
6	Q1 - 6			○	○	
7	Q1 - 7					
8	Q1 - 8			○		
9	Q2 - 1			○	○	
10	Q2 - 2			○	○	
11	Q2 - 3	○	○	○	○	○
12	Q2 - 4	○	○	○	○	○
13	Q2 - 5	○	○	○	○	○
14	Q2 - 6			○	○	
15	Q2 - 7			○	○	○
16	Q2 - 8			○	○	
17	Q3 - 1			○	○	○
18	Q3 - 2			○	○	○
19	Q3 - 3			○	○	
20	Q4 - 1					
21	Q4 - 2				○	
22	Q4 - 3					
23	Q4 - 4				○	
24	Q4 - 5			○	○	
25	Q5 - 1					
26	Q5 - 2			○	○	
27	Q5 - 3				○	
28	Q5 - 4			○	○	
29	Q5 - 5			○	○	
30	Q5 - 6			○	○	
31	Q6			○		
32	Q7 - 1					
33	Q7 - 2					
34	Q8					
35	Q9 - 1 - ア					
36	Q9 - 1 - イ				○	
37	Q9 - 1 - ウ					
38	Q9 - 1 - エ					
39	Q9 - 1 - オ				○	
40	Q9 - 1 - カ	○	○	○	○	○
41	Q9 - 1 - キ	○	○	○	○	○
42	Q9 - 2 - ア					
43	Q9 - 2 - イ			○	○	
44	Q9 - 2 - ウ					
45	Q9 - 2 - エ					
46	Q9 - 2 - オ				○	
47	Q9 - 2 - カ			○	○	
48	Q9 - 2 - キ	○	○	○	○	○
49	Q9 - 3 - ア					

ID	全項目	6	3	性	年	職
50	Q9 - 3 - イ				○	○
51	Q9 - 3 - ウ			○	○	
52	Q9 - 3 - エ				○	
53	Q9 - 3 - オ					
54	Q9 - 3 - カ					
55	Q9 - 3 - キ			○	○	
56	Q9 - 3 - ク	○	○	○	○	○
57	Q9 - 3 - ケ	○	○	○	○	○
58	Q9 - 4 - ア					
59	Q9 - 4 - イ				○	
60	Q9 - 4 - ウ					
61	Q9 - 4 - エ				○	
62	Q9 - 4 - オ				○	○
63	Q9 - 4 - カ			○	○	○
64	Q9 - 5 - ア				○	
65	Q9 - 5 - イ					
66	Q9 - 5 - ウ					
67	Q9 - 5 - エ					
68	Q9 - 5 - オ	○	○	○	○	○
69	Q9 - 5 - カ				○	○
70	Q9 - 5 - キ	○	○	○	○	○
71	Q9 - 5 - ク				○	○
72	Q10 - 1 - ア					
73	Q10 - 1 - イ					
74	Q10 - 1 - ウ					
75	Q10 - 1 - エ	○	○	○	○	○
76	Q10 - 1 - オ					
77	Q10 - 1 - カ			○	○	○
78	Q10 - 1 - キ	○	○	○	○	○
79	Q10 - 1 - ク	○	○	○	○	○
80	Q10 - 2 - ア					
81	Q10 - 2 - イ	○	○	○	○	○
82	Q10 - 2 - ウ			○	○	○
83	Q10 - 2 - エ					
84	Q10 - 2 - オ			○	○	
85	Q10 - 2 - カ				○	○
86	Q10 - 2 - キ	○	○	○	○	○
87	Q10 - 3 - ア					
88	Q10 - 3 - イ					○
89	Q10 - 3 - ウ					
90	Q10 - 3 - エ	○	○	○	○	○
91	Q10 - 3 - オ				○	○
92	Q11					
93	Q12					○
94	Q13 - 1	○	○	○	○	○
95	Q13 - 2					
96	Q13 - 3					○
97	Q13 - 4	○	○	○	○	○
98	Q13 - 5					

ID	全項目	6	3	性	年	職
99	Q14 - 1				○	○
100	Q14 - 2					○
101	Q14 - 3				○	○
102	Q14 - 4					○
103	Q14 - 5				○	○
104	Q14 - 6				○	○
105	Q15 - 1					○
106	Q15 - 2					○
107	Q15 - 3					○
108	Q15 - 4					○
109	Q15 - 5					○
110	Q15 - 6					○
111	Q15 - 7					
112	Q15 - 8					○
113	Q15 - 9					
114	Q15 - 10					
115	Q16 - ア					○
116	Q16 - イ					○
117	Q16 - ウ					
118	Q16 - エ					
119	Q16 - オ					○
120	Q16 - カ					○
121	Q16 - キ					○
122	Q16 - ク	○	○	○	○	○
123	Q16 - ケ					○
124	Q16 - コ	○	○	○	○	○
125	Q17 - ア					
126	Q17 - イ					○
127	Q17 - ウ					○
128	Q17 - エ					
129	Q17 - オ					○
130	Q17 - カ					○
131	Q17 - キ					○
132	Q17 - ク	○	○	○	○	○
133	Q17 - ケ					○
134	Q17 - コ	○	○	○	○	○
135	Q17 - サ					○
136	Q18 - 1				○	○
137	Q18 - 2					
138	Q18 - 3					○
139	Q18 - 4					○
140	Q19 - 1					
141	Q19 - 2					○
142	Q19 - 3					
143	Q19 - 4					○
144	Q19 - 5					○
145	Q19 - 6					
146	Q19 - 7					○
147	Q20 - 11					

ID	全項目	6	3	性	年	職
148	Q20 - 12					
149	Q20 - 21			○	○	
150	Q20 - 22			○	○	
151	Q20 - 31					
152	Q20 - 32					
153	Q20 - 41					

ID	全項目	6	3	性	年	職
154	Q20 - 42					
155	Q20 - 51					
156	Q20 - 52					
157	Q20 - 61					
158	Q20 - 62					
159	Q20 - 71			○		

ID	全項目	6	3	性	年	職
160	Q20 - 72					
161	Q20 - 81			○		
162	Q20 - 82					
163	Q21					

### Q13—4

項目：(4) 「きのうは寒かったです」「気にならない」 89.1%

Q2は、(1)から(4)まで、客や参加者への「許可求め表現」についての質問。(1)(2)は年齢差がある。いずれも「いただく」への接続の誤り・過剰な許可求め表現として指摘される表現だが、(3)(4)のような商業関連場面における使用例については、偏りなく「気にならない」段階にあり、すでに「共通語」的位置にあることを示している。

Q9—5—オの「申されますか」は、「言う（か）」の尊敬語としては、謙譲語「申す」+尊敬の助動詞「れる」からなる誤用である。「気にならない」は1割程度だが、属性間の偏りをもたない。このことはどの属性においても固定的に約1割は「申される」を「言う」の尊敬語として使用するという現状を示していると考えられる。しかし、「申される」非選択者が9割ことからすると、「共通語」として受け入れられていない言語形式といえる。

Q13—1「寒いです」・Q13—4「寒かったです」は、いずれも形容詞の丁寧形に関する項目である。形容詞の丁寧形としては、それぞれ「寒うございます」「寒うございました」という「形容詞音便形」+「ございます」(+「過去た」)が規範的とされている項目で、「寒いです」「寒かったです」は、新形とされることが多い(井上史雄 1995)。しかし、それぞれ9割程度が「気にならない」と回答しており、また全ての被調査者属性が説明力を持たないということは、「形容詞」+「です」・「形容詞」+「過去た」+「です」は、すでに「共通語」的位置にあることを意味している。Q14では、規範的とされてきている「ございます形」についても項目がある。それぞれ「寒うございます(44.8%「気になる」)」・「寒うございました(41.4%「気になる」)」と、むしろ半数近くが「気になる」と回答しており、被調査者属性による偏りもあることから、むしろ最大公約数的な「共通語」からは遠いことが分かる。

性・年齢・職業の3つが被調査者属性が説明力を持たない項目は、Q10—1—エ・Q10—2—イ・Q17—ク・Q17—コ。Q17—コは「その他」項目である。

### Q10—1—エ

質問：それでは、目上の人ここに挙げた(1)から(3)のことを言うとき、下線部分について、あなたはどの言い方をしますか。言うと思うものを幾つでも選んでください。

項目：(1)「その目上の人をここで待っている」(エ)「お待ちしてます」 16.6%

### Q10—2—イ

項目：(2)「その目上の人話を聞きたいと思う」(イ)「お聞きしたい（と思います）」 45.7%

#### Q17ーク

質問：あなたは、今まで敬語をどのような機会に身に付けてきたと考えていますか。この中から幾つでも選んでください。

項目：(ク)「テレビやラジオで、出演者の話し方を聞いて」19.2%

Q10ー1ーエ「お待ちしてます」は、「待つ」+「ている」の前半部分「待つ」のみ謙譲語化した「お待ちしています」の口語的な表現で、誤用とはいいくらい。また、Q10ー2ーイ「お聞きしたい」は「聞きたい」の謙譲語として問題のない表現である。このことから、これら2項目は偏りを持たない項目として抽出されたといえる。

Q17ーク「テレビやラジオで、出演者の話し方を聞いて」敬語を学習してきたという回答は、約2割。性・年齢・職業という社会差は見られない。一方、都道府県・地域・都市規模においては、それぞれ「1：やや説明力を持つ」項目である。北陸(31.1%)・人口10万未満中都市(24.8%)にやや多い。テレビ・ラジオ出演者の話し方については、すでに規範としての役割を期待する時代ではなくなってきた、という論が時に展開されるが、2割が規範としている現状をどのように捉えるかによって、異なるだろう。また、ここにはテレビ・ラジオの「出演者」がどのテレビ局のどのような番組でどのような役割を担っている「出演者」かについては触れられていないので、その点については不明である。

#### 5.3. H9年度調査における説明力のない項目

H9年度調査における6つの被調査者属性において説明力のない項目は、Q20ーエ。

#### Q20ーエ

質問：あなたは、これから時代の言葉遣いはどうあるべきだと思いますか。ここに挙げた意見の中から、特に大切だと思うものを二つ選んでください。(選択肢：5+「分からぬ」)

項目：(エ)「話す人の品の良さを表すものであるべきだ」7.3%

他の選択肢は、次の通りで、それぞれ選択肢の右に示した被調査者属性が説明力を持つ。

(ア)「主張を論理的に伝えるものであるべきだ」23.9% 地域・都市規模・性・年齢・職業

(イ)「気持ちを、分かりやすく飾らずに伝えるものであるべきだ」63.7% 都道府県・年齢

(ウ)「気配りを表すものであるべきだ」42.4% 都市規模・性・年齢

(オ)「人間関係を滑らかにするものであるべきだ」46.6% 都市規模・年齢

「分からぬ」2.4% 年齢・職業

「上品さ」を求める回答は1割に満たない少数回答ではあるが、その1割弱の内部については、被調査者属性に関わりなく、まんべんなく支持された考え方であるといえそうである。

性・年齢・職業の3項目のみ説明力を持たない項目はQ17ー6・Q17ー7。

#### Q17ー6

質問：ここに挙げた（1）から（8）の下線部分では、敬語が正しく使われていると思います

表7. H9調査：被調査者属性が説明力を持たない項目

【凡例】 6：被調査者全6属性で説明力なし 3：性・年齢・職業3属性で説明力なし 性：性説明力なし  
年：年齢説明力なし 職：職業説明力なし ID：項目ID DK：分からない ○：該当項目説明力なし

ID	全項目	6	3	性	年	職
1	Q1					
2	Q2-1					
3	Q2-2					
4	Q2-3					
5	Q3-1					
6	Q3-2					
7	Q3-3					
8	Q3-4					
9	Q4-1			○	○	
10	Q4-2					
11						
12	Q4-4					
13	Q4-5					
14	Q4-6					
15	Q5-1					○
16	Q5-2			○	○	
17	Q5-3			○	○	
18	Q5-4				○	
19	Q5-5			○	○	
20	Q5-6				○	
21	Q5-7					
22	Q5-8			○	○	
23	Q5-9			○		
24	Q5-10			○	○	
25	Q6-1			○	○	
26	Q6-2			○		
27	Q6-3			○	○	
28	Q6-4			○		
29	Q6-5			○		
30	Q7-1					
31	Q7-2					

ID	全項目	6	3	性	年	職
32	Q7-3					
33	Q7-4					
34	Q8			○	○	
35	Q9					
36	Q10			○	○	
37	Q10 S Q			○	○	
38	Q11					
39	Q11 S Q1					
40	Q11 S Q2					
41	Q11 S Q3					
42	Q12					
43	Q13			○		
44	Q14				○	
45	Q15				○	
46	Q16					
47	Q17-1					○
48	Q17-2					
49	Q17-3					
50	Q17-4					
51	Q17-5					
52	Q17-6			○	○	○
53	Q17-7			○	○	○
54	Q17-8					
55	Q18-1					
56	Q18-2					
57	Q18-3					
58	Q19-1					○
59	Q19-2					
60	Q19-3					
61	Q19-4			○	○	
62	Q20-ア					

ID	全項目	6	3	性	年	職
63	Q20-イ			○		○
64	Q20-ウ					○
65	Q20-エ	○	○	○	○	○
66	Q20-オ			○		○
67	Q20-DK			○		
68	Q21-1				○	○
69	Q21-2					○
70	Q22-1					○
71	Q22-2			○		○
72	Q22-3					○
73	Q23-11			○		
74	Q23-12					
75	Q23-21			○		
76	Q23-22					
77	Q23-31			○		
78	Q23-32					
79	Q23-41					
80	Q23-42					
81	Q23-51					
82	Q23-52					
83	Q23-61					
84	Q23-62					
85	Q23-71					
86	Q23-72					
87	Q23-81					
88	Q23-82					
89	Q24-1				○	
90	Q24-2				○	○
91	Q24-3					

か。それとも正しく使われていないと思いますか。

項目：(6) 「間もなく先生がお見えになります」「正しく使われていると思う」 85.5%

Q17-7

項目：(7) 「この電車には御乗車できません」「正しく使われていると思う」 63.2%

いずれも、性・年齢・職業による偏りは見られないが、都道府県・地域が「1：やや説明力を持つ」項目である。Q17-6は問題のない尊敬語表現について中国で「正しく使われている」が77.6%と少なく、Q17-7では、北海道(50.0%)・九州(53.7%)で「正しく使われている」が少ない。「御乗車できません」は、「御乗車になることができません」の省略形として多用される表現だが、「お／ご～できる」は謙譲語「お／ご～する」の可能形であるため、尊敬語としては問題のある表現とされるものである。

敬語については、井上史雄(1999)・吉岡泰夫(2000)・吉岡泰夫(近刊)・田中ゆかり(近刊)でも示されているように、地域方言敬語の影響が大きいため、地域差が説明力を持つことが同世論調査において比較的多く観察される項目となっている。

#### 5.4. H10年度調査における説明力のない項目

H10年度調査における6つの被調査者属性において説明力のない項目は、Q3-4・Q6-4・Q6-5・Q13一カ。性・年齢・職業の3つの被調査者属性のみ説明力を持たない項目はなかった。

##### Q3-4

質問：ここにあげた（1）から（5）について、あなたはそう思いますか。それとも、それは思いませんか。

項目：（4）「敬語を使うべきときに敬語を使わないで話すのは、感じが良くない」

「そう思う」80.8%

敬語をどのような場面においても使用しない、いわゆる「タメロ／タメ語」の場面を問わない使用については、8割以上が「感じが良くない」としている。若年タレントの「タメロ」使用がしばしば話題として取り上げられることなどから、年齢差がみられそうな項目であるが、年齢も説明力を持たない。「共通語」的認識として、「敬語を使うべきときに敬語を使わないで話すのは、感じが良くない」は維持されていることが分かる。しかし、逆の観点から見ると、2割弱においては、地域・都市規模・性・年齢・職業を問わず、「感じがよくない」とは思っていない、つまり場面を問わない「タメロ／タメ語」を容認していることになる。

##### Q6-4

質問：ふだんの生活の中で、間違った言い方やふさわしくない言い方として、人のことばが気になることがあると思いますが、ここに挙げた（1）から（8）の文中の下線部分の言い方は、あなたにとって気になりますか、それとも気になりませんか。

項目：（4）「鈴木さんはおいでになられますか」「気にならない」69.9%

##### Q6-5

項目：（5）「先生は講義がお上手ですね」「気にならない」68.1%

Q6-4（4）「おいでになられますか」は、「来る」の尊敬語「おいでになる」+尊敬の助動詞「れる」の二重敬語形式の表現である。7割弱が「気にならない」という回答で、被調査者属性が説明力を持たない。この二重敬語形式は、すでに偏りなく浸透してきていることを示すと考えられる。Q6-5（5）は目上に対しての対面的な評価的言説についての是非を問う項目である。従来的な規範では、プラスの評価であっても目上に対しては対面的に評価的言説を示すことは、失礼にあたるという考え方についての、変化を観察するための項目と考えられる。結果からは、7割弱において被調査者属性に偏りなく、目上への対面的評価的言説の提示については、「気にならない」という現状となっていることが分かる。待遇行動としての「目上への対面的評価的言説

表8. H 10 調査：被調査者属性が説明力を持たない項目

【凡例】 6：被調査者全6属性で説明力なし 3：性・年齢・職業3属性で説明力なし 性：性説明力なし  
年：年齢説明力なし 職：職業説明力なし ID：項目ID DK：分からない ○：該当項目説明力なし

ID	全項目	6	3	性	年	職
1	Q1 - 1			○		○
2	Q1 - 2					○
3	Q1 - 3					
4	Q1 - 4					○
5	Q2 - 1					
6	Q2 - 2					
7	Q2 - 3					
8	Q3 - 1					○
9	Q3 - 2			○		
10	Q3 - 3			○		
11	Q3 - 4	○	○	○	○	○
12	Q3 - 5					○
13	Q4 - 1			○		
14	Q4 - 2					
15	Q4 - 3					○
16	Q5 - 1			○		
17	Q5 - 2				○	○
18	Q5 - 3					
19	Q5 - 4					
20	Q6 - 1			○		○
21	Q6 - 2			○		○
22	Q6 - 3				○	○
23	Q6 - 4	○	○	○	○	○
24	Q6 - 5	○	○	○	○	○
25	Q6 - 6				○	○
26	Q6 - 7					
27	Q6 - 8			○		○
28	Q7 - 1				○	○
29	Q7 - 2				○	○
30	Q7 - 3					
31	Q7 - 4					○
32	Q7 - 5			○	○	○
33	Q8 - ア					
34	Q8 - イ					
35	Q8 - ウ					
36	Q8 - エ			○		
37	Q8 - オ					
38	Q8 - カ				○	
39	Q8 - キ					
40	Q8 - ク			○		
41	Q8 - ケ					
42	Q8 - コ					
43	Q8 - サ					
44	Q8 - シ					
45	Q8 - ス					
46	Q8 - セ					
47	Q8 - DK					
48	Q9 - 1					
49	Q9 - 2					

ID	全項目	6	3	性	年	職
50	Q9 - 3				○	○
51	Q9 - 4					
52	Q10					
53	Q10 - ア					
54	Q10 - イ					
55	Q10 - ウ					
56	Q10 - エ					
57	Q10 - オ					
58	Q10 - カ					
59	Q10 - キ					
60	Q10 - ク					
61	Q10 - ケ					
62	Q10 - コ					
63	Q10 - サ					
64	Q10 - シ					
65	Q10 - ス					
66	Q10 - セ					
67	Q10 - ソ					
68	Q10 - タ					
69	Q10 - チ					
70	Q10 - ツ					
71	Q10 - テ					
72	Q10 - DK					
73	Q11					
74	Q11 - ア					
75	Q11 - イ					
76	Q11 - ウ					
77	Q11 - エ					
78	Q11 - オ					
79	Q11 - カ					
80	Q11 - キ					
81	Q11 - ク					
82	Q11 - ケ					
83	Q11 - コ					
84	Q11 - サ					
85	Q11 - シ					
86	Q11 - ス					
87	Q11 - セ					
88	Q11 - ソ					
89	Q11 - タ					
90	Q11 - チ					
91	Q11 - ツ					
92	Q11 - テ					
93	Q11 - DK					
94	Q12					
95	Q13 - ア			○		
96	Q13 - イ				○	○
97	Q13 - ウ			○		
98	Q13 - エ			○	○	

ID	全項目	6	3	性	年	職
99	Q13 - オ			○		
100	Q13 - カ	○	○	○	○	○
101	Q13 - キ					
102	Q13 - ク			○		
103	Q13 - DK			○		
104	Q14					
105	Q15					
106	Q16					
107	Q17 - 1			○	○	
108	Q17 - 2					
109	Q17 - 3					
110	Q17 - 4			○	○	
111	Q17 - 5			○		
112	Q17 - 6					
113	Q17 - 7					
114	Q17 - 8					
115	Q17 - 9					
116	Q17 - 10					
117	Q17 - 11					
118	Q17 - 12					
119	Q18 - 1 - アル					○
120	Q18 - 1 - ワカル					
121	Q18 - 2 - アル					
122	Q18 - 2 - ワカル					
123	Q18 - 3 - アル					
124	Q18 - 3 - ワカル					
125	Q18 - 4 - アル					
126	Q18 - 4 - ワカル					
127	Q18 - 5 - アル					
128	Q18 - 5 - ワカル					
129	Q18 - 6 - アル					
130	Q18 - 6 - ワカル					
131	Q18 - 7 - アル					
132	Q18 - 7 - ワカル					
133	Q18 - 8 - アル					
134	Q18 - 8 - ワカル					
135	Q19 - 1					
136	Q19 - 2					
137	Q19 - 3					
138	Q19 - 4					
139	Q19 - 5					
140	Q20 - 1					
141	Q20 - 2			○		
142	Q20 - 3			○		
143	Q20 - 4					
144	Q20 - 5					○
145	Q20 - 6					
146	Q20 - 7					
147	Q20 - 8					

ID	全項目	6	3	性	年	職
148	Q21 - 1			○		
149	Q21 - 2			○		
150	Q21 - 3			○		

ID	全項目	6	3	性	年	職
151	Q21 - 4					
152	Q21 - 5			○		○
153	Q21 - 6					

ID	全項目	6	3	性	年	職
154	Q21 - 7					
155	Q21 - 8				○	
156	Q22				○	

の提示回避」は、すでに「共通語」的認識の位置にないことを示している。

#### Q13一力

質問：あなたは、漢字についてどのような意識を持っていますか。この中から、当てはまるものがあれば、幾つでも選んでください。

項目：(カ) 「ワープロなどがあるので、これからは漢字を書く必要は少なくなる」 9.3%

Q13の漢字についての意識については、国立国語研究所（近刊）「第2章第2節 漢字に関する問い合わせ」において、ワープロ・パソコンの利用について質問した項目などとの関連から分析されている。

#### 6. 他の項目との関連性の低い項目

ここでは、項目と被調査者属性ではなく、ある項目と他の項目との関連性についてみていく。本来、CATDAP-01 は、最適な説明変数の探索という目的で作られた解析法である。ここでは、被調査者属性ではなく、他の項目において説明力を持たない項目を CATDAP-01 の結果から抽出していく。項目の中にも別のある項目、あるいは事象をよく説明する、隠れた「説明変数」である可能性を示す項目が存在することについては、田中ゆかり（近刊）で触れた。

他の項目において説明力を持たない項目を仮に、項目全体の70%以上に対して「0：説明力を持たない」項目とすると、各年度世論調査項目において、表9で示した項目が抽出された。これらの項目は、他の項目との関連性がない、あるいは希薄な項目ということになる。選択率の著しく低い項目が多い。例えば、H7年度調査Q1「よりよい言葉遣いのための心がけ」のうち、選択肢項目「古典などを参考にする（3.9%）」、H8年度調査Q1「おビール（2.5%）・「おソース（3.9%）」「お紅茶（3.4%）」や、同年度Q9「目上に対する言い方（相手に関すること）」の「その他（各項目において0.4%～0.5%）」、同年度Q10「目上に対する言い方（自分に関すること）」の「その他（各項目において0.2%～0.9%）」である。一方、H7年度調査Q1「よりよい言葉遣いのための心がけ」のうち、選択肢項目「平易な言葉遣いを心がける（54.5%）」や、H9年度調査Q20「これからの時代にあるべき言葉遣い」の選択肢のうちの一つ「相手への気配り（42.4%）」、H10年度調査Q13「漢字についての意識」の選択肢の一つ「ワープロ・パソコンの普及で漢字を書く必要がなくなる（9.3%）」のように、必ずしも選択率が著しく低い項目ばかりでもない。また、H9年度調査Q10「性別と言葉遣い：同性と異性では言葉遣いが変わるか」のサブクエスチョン「言葉遣いがより丁寧にかわるのは同性に対してか異性に対してか」や、H10年度調査Q6「敬語」丁重語としての「まいります」について気になるか否かについて尋ねた項目なども、他の項目との関連の薄い項目として抽出してきた。選択率の著しい低さが、他の項目との関連性を持たないということにつながっていることは推測できるが、選択率が著しく低いわけではない項目などにおける、他の項

表9. H 7調査～H 10調査：他の調査項目について説明力を持たない項目

H 7調査項目	H 8調査項目	H 9調査項目	H 10調査項目
Q1-3	Q1-4	Q10 S Q	Q6-3
Q1-4	Q1-5	Q15	Q13-カ
	Q1-6	Q20-ウ	
	Q9-1-カ		
	Q9-4-オ		
	Q9-5-キ		
	Q10-1-キ		
	Q10-2-カ		
	Q10-3-エ		

※注：「説明力を持たない項目」CATDAPの結果から、項目全体の70%以上に対して全く説明力を持たない

目との関連性の低さについては、要因の推測ができなかった。

## 7. おわりに

文化庁国語課による『国語に関する世論調査』の平成7年度調査から平成10年度調査までのロウ・データを用い、CATDAP-01の解析結果に基づき、「偏りを持たない項目」について報告を行ってきた。報告は、各年度ごとの調査項目において被調査者の地域的・社会的属性が説明力を持たない／弱い項目を抽出することを中心としてきた。どのような項目が「偏りを持たない」、衆目の一致する項目であるか、ということを知ることは、裏表の関係にある「多様性のある項目」を知ることとともに、「共通語」・「共通語」的認識を視野に入れた調査における「項目選定」の際、意義があると考える。

今回のデータにおける、典型的な「偏りを持たない」項目は、従来的な言語規範に関わる項目、従来「誤用／誤認識」・「新形／新認識」とされていながらすでに「共通語」的位置にある項目、回答数が非常に少ないために偏りが抽出されない項目であった。このうち、「従来『誤用／誤認識』・『新形／新認識』とされていながらすでに『共通語』の位置にある項目」は、「共通語」あるいは「共通語」的認識の変遷を顕著に示す項目と言えるだろう。

### 注

- 1 『「国語に関する世論調査』問題別分析報告書』は、2000年6月に国語審議会に提出された。2001年度中に国立国語研究所より刊行される予定という。
- 2 AICとは、Akaike Information Criterion の略(Akaike, H 1987)。統計モデルの選択基準として用いられたり、有用な説明変数の個数を決める基準として用いられる(柳井晴夫 1994, pp.68-114)。An Information Criterionとも(日本統計協会 1992, p.6)。
- 3 付録CD-ROMに、各年度世論調査項目についてのAIC要約値のマトリックスをMS-DOSテキストファイルとして添付する。ファイル名は、年度ごとにh07catdap.txt～h10catdap.txt。マトリックスで示されている項目Q番号等と項目IDの対照は、本稿の表5～表8の「ID」欄と「全項目」

欄を参照のこと。「Q」は各年度調査報告書の質問番号を示し、Qの後の数字またはカタカナは選択肢を表している。各項目の具体的な質問文・選択肢については、付録 CD-ROM の収録データ 3 (『国語に関する世論調査』問題別分析報告書 pp.114-155) を参照のこと。

4 実際には、「都道府県」「地域」「都市規模」は標本抽出の際に事前に分かっている被調査者属性である。

5 ただし、表 4 H10年度調査における性・年齢・職業がきわめて強い説明力を持つ項目が、それぞれ42, 50, 52項目あることになっているが、表 4 注で示したように、「配偶者の呼称」という既婚の男女別に尋ねる質問に関する項目が42項目あることが大きい。その関連項目をはずすと、性・年齢・職業における大きな説明力をもつ項目数は、0, 21, 10項目となり、他年度世論調査と大差ない数値となる。

### 文献一覧

- 井上 史雄 (1995) 「丁寧表現の現在—デス・マスの行方」『国文学』40-14, 学燈社
- 井上 史雄 (1999) 『敬語はこわくない』講談社新書
- 国立国語研究所 (近刊) 『国語に関する世論調査』問題別分析報告書 財務省印刷局
- 坂元 慶行・桂 康一 (1988) 「カテゴリカルデータのモデル分析—プログラム CATDAP-01,-02 (改訂版) の紹介—」『統計数理』36, 211-222, 統計数理研究所
- 田中 ゆかり (近刊) 「多様性から見た調査結果の分析」国立国語研究所『国語に関する世論調査』問題別分析報告書 財務省印刷局
- 豊田 秀樹 (1998) 『シリーズ<調査の科学 1 > 調査法講義』朝倉書店
- 日本統計協会 (1992) 「AIC基準量」『統計小辞典』日本統計協会
- 柳井 晴夫 (1994) 『多変量データ解析法—理論と方法—』朝倉書店
- 吉岡 泰夫 (2000) 「敬語使用と規範意識の社会差・地域差」『計量国語学』22-6, 計量国語学会
- 吉岡 泰夫 (近刊) 「敬語についての留意点」国立国語研究所『国語に関する世論調査』問題別分析報告書 財務省印刷局
- Akaike, H. (1987) Factor Analysis and AIC. *Psychometrica*. 52. 317-332.

(投稿受理日 : 2000年7月31日)

(改稿受理日 : 2000年12月26日)

---

田中 ゆかり (たなか ゆかり)

日本大学文理学部

156-8550 世田谷区桜上水3-25-40

E-mail: yukari@chs.nihon-u.ac.jp

# The Public Opinion Survey of the Japanese Language (1995-1998): A study of items that are not accounted for by informants' attributes

TANAKA Yukari

Nihon University

## Keywords

Public Opinion Survey of the Japanese Language, accountableness of attributes,  
social attribute, regional attribute, CATDAP

## Abstract

This paper offers an analysis of the data presented in the Public Opinion Survey of the Japanese Language (1995-1998) conducted by Japanese Language Division, Agency of Cultural Affairs. The paper, in particular, aims to discuss the researched items for which informants' attributes had no/little accountableness. These are the items which did not show any particular 'bias' due to informants' attributes, such as regional or social attributes. By studying what items did not show such 'bias' in the Public Opinion Survey based on male/female informants aged 16 and over, we are able to obtain insights into what 'Common Japanese' or the perception of what 'Common Japanese' will be in the future. The following are the representative items that did not show 'bias': 1) items concerning perceptions of traditional standard language, 2) items which formerly were regarded as 'misuses' or 'new' but are now regarded as 'standardised', 3) items which do not show 'bias' because there are not enough responses from informants.